

# 30amE-139S

薬局が有する医薬品使用量情報を活用した疾患流行時期の推定

○河原 匡秀<sup>1</sup>, 伊集院 一成<sup>1,2,3</sup>, 根岸 健一<sup>1</sup>, 林 譲<sup>3,4</sup>, 矢島 毅彦<sup>3</sup>(<sup>1</sup>東京理大薬,<sup>2</sup>田無薬品,<sup>3</sup>ヘルスヴィジランス研,<sup>4</sup>帝京平成大薬)

【目的】様々な季節性疾患の流行時期は一般に、同一地域では、毎年大きくは変動しないと考えられる。従って、薬剤師は、その地域における代表的な季節性疾患の流行時期、疾患の流行順序及びそれらのおおよその間隔を、経験的に認識している。本研究では、薬局が有する医薬品使用量データを用いて、季節性疾患の流行時期、順序及び相互の間隔を科学的に明らかにすることを目的とする。

【方法】東京都西東京市に位置する薬局、及び東京都新宿区に位置する薬局において代表的な流行性疾患に使用される医薬品の2009年6月1日から2012年5月31日における毎日の処方人数データを収集した。このデータから1週間周期がある人間社会のリズムを除去するため、1週間の幅の移動平均法を適用した。このスムージング後のデータが急激に増加し、閾値を上回る点を医薬品の処方増加期間(主処方期間)開始日とした。閾値は、FUMI(Function of Mutual Information)理論で算出した検出限界から算出した。

【結果および考察】主に感染症予防に使用される含嗽薬と発熱を伴う感染症に使用されるNSAIDsの主処方期間開始日を比べると、郊外にある西東京市の薬局ではNSAIDsが、含嗽薬に対して0~14日遅行し、都心部である新宿区の薬局では0~2日遅行した。この違いは、地域における1日の人口変動の大きさや人が集中する交通機関の利用者数に起因すると考えられる。事実、日中と夜間の人口変動と交通機関の利用者数は、都心部の方が、郊外に比べて大きかった。そのため、都心部では種々のステージの患者が混在し、本研究の結果が得られたと考えられる。今後は薬局の数と地域を拡大することで、人口変動の大小や交通機関利用者数と、上記のラグ(遅行)の関係を解明していきたいと考えている。